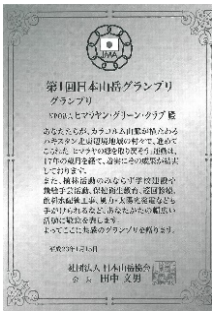
日本山岳グランプリ

日本山岳グランプリは、本協会の創立 50 周年を記念して創設された贈賞制度である。

長年にわたり登山やスポーツクライミングを実践するとともに、広く国民に感動や勇気を与え、顕著な功績を挙げられた個人又はグループ及び山岳文化に関する調査・研究等で顕著な功績を挙げられた個人又はグループを顕彰し、より一層の登山・スポーツクライミング及び山岳文化の振興の醸成に資するものとして制定された。受賞者には楯と副賞が贈られる。

第 1 回日本山岳グランプリ（2010 年度）

＜グランプリ＞



第 1 回日本山岳グランプリのランプリは、日本山岳会京都支部の斎藤惇生氏から推薦された NGO グリーンクラブに決定した。

同団体は、バルトロ氷河舌端のキャンプ地で樹木がポーターの燃料になっているのを見て登山隊の責任と感じ、賛同者に呼び掛けて、灯油支援と植林を始めた。さらに下流のポーターの村で植林と小学校建設を進め、また、母子保健とヨード欠乏症対策を主とした巡回診察、水道建設まで、山岳地域住民への総合支援を 18 年間継続してきた功績は多大である。

＜特別賞＞

第 1 回日本山岳グランプリの特別賞は、日本山岳文化学会から推薦された斎藤一男氏に決定した。

斎藤氏は、1955 年に先鋭的なアルピニスト集団として知られる山学同志会を創立し、積雪期国内登攀からアルプス、ヒマラヤで世界的な登攀を実践する会員を輩出。また、東京都山岳連盟、(社) 日本山岳協会などの会長を歴任されるなど永年に亙って日本の登山界に抜群の指導力を発揮し、牽引されてきた功績は誠に顕著である。

一方、登山思想史や山岳書誌の研究に励まれ、数多い著書、論文などの執筆活動はもとより、日本山ノ書会、山岳展望ノ会、日本山岳文化学会などを創立して我が国における山岳文化の啓蒙活動に尽力された功績は誠に大きい。

第 2 回日本山岳グランプリ（2011 年度）

第 2 回日本山岳グランプリは、埼玉県山岳連盟から推薦された平山裕示氏に決定した。

平山氏は、2 度のワールドカップ総合優勝をはじめとするコンペクライミングでの世界的成果、ホワイトゾンビ（8c）での世界初の 5.14b のオンサイト成功等世界最高難度クライミングの実践。クライミング史上初めてヨセミテ・サラテルート（1,100m，35 ピッチ、5.13c）のオンサイト挑戦や、サラテのレッジ・トゥ・レッジ（1,100m、20 ピッチ、5.13d）のノーフォール 13 時間完登、エルキャプタン・the Nose（1,100m,31 ピッチ、5.14a）のスピードアッセント世界最速記録の樹立と更新（2 時間 37 分 5 秒）等、日本が世界に誇るオールランドクライマーとしての活躍に対して。

第 3 回日本山岳グランプリ（2012 年度）

第 3 回日本山岳グランプリは、日本ヒマラヤ協会から推薦された山森欣一氏に決定した。

山森氏は、永年に亙って、我が国のヒマラヤ登山者の実態把握及び遭難状況に関する情報を詳細に収集し、その現状を登山界に提供されてきた。特に入山した隊員名に焦点を合わせ、ヒマラヤ登山の全体像を浮き彫りにしている点がユニークである。

加えて、日本国内の日本人の登山死亡遭難事故を 1945 年から 2009 年までの 65 年間に亙り調査し、それを種々な観点から分析・発表して登山界に警鐘を鳴らしてこられた。

日本山岳文化学会・遭難分科会の一員として、国内遭難事故の実態が放置されている現状を憂い、独自で調査研究し、『登山死亡遭難事故事例集』として纏めあげるなど、登山界に尽力された功績は誠に大きい。

＜2013 年度＞

該当者なし

第 4 回日本山岳グランプリ（2014 年度）

第 4 回日本山岳グランプリは、日本ヒマラヤ協会から推薦された大西保（おおにし　たもつ）氏（大阪）。

大西氏は、長年にわたりネパール・ヒマラヤでの高所登山を実践され、とりわけ西北ネパール辺境地域での調査活動は、地理的空白部の解明に大きく寄与された。

大西氏の踏査・登山は、谷に分け入り峠に至り、山稜を跋渉して未踏の頂に登り、既存の地図と GPS を用いて山座同定や文化遺産の調査など辺境地帯の地理や文化的情報を収集して発信するものでした。それらの解明は地図の修正や登山解禁峰の制定などに貢献された。

一方、大西氏は韓国のヒマラヤニストとの交流を深め、支援を続けることで絶大なる信頼を得、大阪府山岳連盟と大韓山岳連盟が共催する「日・韓岳人シンポジウム」の開催に尽力されるなど韓国登山界との国際交流に大きく貢献された。

第 5 回日本山岳グランプリ（2015 年度）

第 5 回日本山岳グランプリは、岐阜県山岳連盟から推薦された飛騨山岳会に決定した。

飛騨山岳会は、日本の近代登山の黎明期の明治 41（1907）年に逸早く創立された地域山岳会で、日本山岳会（1905 年創立）に次ぐ歴史と伝統を誇る。爾来、紆余曲折を経ながらも 107 年の長きにわたって笠ケ岳、錫杖岳などをホームグランドに地域に密着した山岳文化の振興に貢献された。また、登山技術の向上を追及した実践的登山を継続され、その活動は国内外に及び、メルー北峰（インド）初登頂、モンタ・カンリ(中国)初登頂など登山史に燦然と輝く数々の登攀記録を残されてきた。

一方、岐阜県山岳連盟の創立に尽力されて以来、岳連の主要山岳会として抜群の指導力を発揮し、岐阜県山岳連盟を牽引されてきた功績は多大である。

第 6 回日本山岳グランプリ（2016 年度）

第 6 回日本山岳グランプリの受賞は、日本のインド・ヒマラヤの第一人者、沖允人（おき　まさと）氏に決定した。

沖氏は足利工業大学名誉教授（81 歳）広島市出身。足利工業大学理工学部電気工学科を卒業後、京都大学大学院で建築を学び、工学博士号を取得。1990 年から足利工業大学建築科教授となる。1974 年から 1 年半、インド北部の研究学園都市、ルールキーの中央建築研究所で客員研究員を務める。

登山は、名古屋在住時に中京山岳会で活躍。中央アルプス、御嶽山などの地域研究を行う。1965 年には、愛知県岳連隊でダウラギリⅡ峰に遠征。栃木県足利市に移られてからは、栃木周辺の山を登られ「とちぎの山」を著す。以後、近年まで毎年のように海外登山を実践。特にインドのカシミール、ラダック、ザンスカールに足繁く通われ、1985 年には日印合同隊を率いてサセル・カンリⅡ峰に初登頂。昨年、日本山岳会創立 110 周年を記念して JAC 東海が上梓した「インド・ヒマラヤ」の編集長を務めた。インド登山界の人脈も太い。

第 7 回日本山岳グランプリ（2017 年度）

第 7 回日本山岳グランプリは、長野県山岳協会から推薦のあった古原和美氏に決定した。

古原氏は、大正 12（1923）年 2 月、熊本県に生まれる。1948 年に熊本医科大学を卒業後、1956 年に医学博士号（熊本大学）を取得。1956 年から長野県大町保健所所長、豊科保健所所長などを歴任し、1992 年退職。その間、信州大学医学部順応生理学教室などで非常勤講師を務める。其の後、日本登山医学会の創立に尽力されるなど長年に亘り登山医学に果たされた功績は多大である。

1942 年頃から故郷の傾山･阿蘇山塊で数々の初登攀を記録した後、信州に移られてからは、後立山連峰を

中心に活躍。1958 年には深田久弥氏らと一人 30 万円のライト・エクスペディションをネパールのジュガール、ランタン・ヒマラヤで実践され、後進に夢と希望を与える。1961 年に長野県山岳連盟（当時）の初代会長に就任された後、1964 年には岳連隊を率いてギャチュンカンの初登頂に成功するなど国内外で活躍された。

第 8 回日本山岳グランプリ（2018 年度）

第 8 回日本山岳グランプリは、長野県松本市在住の馬目弘仁氏に決定した。馬目氏は、1969 年 3 月、福島県いわき市生まれ。日本を代表するアルパインクライマーで、独自のスタイルで日本の冬壁の可能性を追求して”Japanese Style”を提唱する。高校山岳部に入部し、クライミングに嵌る。信州大学進学と同時に松本 Climbing Mate Club に入会。現在は信州大学学士山岳会に所属。国内で数多くの新ルートの開拓や初登記録を残し、海外では、バギラティ II 峰南西ピラー（94 年）、メルー峰シャークスフィン（06 年）、テンカンポチェ峰北東壁（08 年）、キャシャール南ピラー（12 年）などの記録を残す。キャシャール南ピラー初登攀は、2012 年の第 21 回ピオレドール賞（仏）に輝いた。

07 年冬に英国 BMC の国際ウィンター・クライマーズミートに参加した後、その思想を国内でも実践しようと、ウィンター・クライマーズ・ミーティングを開催。国内の現役クライマーを集め、一緒に冬壁を登り、技術の研鑽や交流を図る。その結果、多くの日本人クライマーが近年、海外の山々で多くの結果を残すようになってきた。これら長年に亘って後進を牽引されてきた多大な功績に対してグランプリが贈られた。

第 9 回日本山岳グランプリ（2019 年度）

第 9 回日本山岳グランプリは、永年、山岳雑誌『岩と雪』の編集長を務められた池田常道氏に決定した。池田氏は、1944 年 12 月、埼玉県浦和に生まれ。高校時代から街の山岳会で東京近郊の山歩きを始める。早稲田大学時代にハイキングクラブに入会し、顧問の川崎隆章氏の薫陶を受け、上越国境・南会津の山々を彷徨する。

1969 年に㈱山と渓谷社に入社。1972 年から『岩と雪』の編集に携わり、77 年から 95 年の休刊まで編集長を務める。編集長時代は、巻末の英文サマリーを充実させ、海外登山界との交流を促進。世界の登山誌を結ぶ国際ネットワークを構築し、定期的な情報交換を果たす。雑誌編集の傍ら、『高所登山研究』『ヒマラヤ研究』『ビッグ・ウォール・クライミング』などの山岳書を企画・編集。共訳書に『ヒマラヤン・クライマー』『ヒマラヤ・アルパインスタイル』などがある。退職後フリーとなり、2013 年には『世界の山岳大百科』の日本語訳を監修。2015 年には『現代ヒマラヤ登攀史』を上梓されるなど、長年に亘って登山界に尽力された多大な功績に対してグランプリが贈られた。